

掲載号・キーワード・執筆者	内容
<p>その 36 (ニューズレター No.106 2023.03.発行) 「佐賀の空襲と有明海」 矢野 生子 (長崎県立大学 経営学部 教授)</p>	<p>有明海は約 6 メートルという日本一の干満差があり、神話の「海彦山彦」に出てくる「(潮)干珠・(潮)満珠」のもとになったという説もある。この壮大かつ不思議な自然現象が佐賀の空襲において予想外の結果を生じさせたという話を佐賀経済調査協会の宮崎善吾(故人)さんに昔、伺ったことがある。宮崎さんによると、「米軍はまず、昼間に爆撃対象地域を調査し、海岸線から何キロに佐賀市内があるかを測量して帰る。しかし、空襲の時間は夜中でしかも当時有明海は引き潮だった。引き潮により海岸線が大きく南に下がっていたため、諸富、北川副、大崎地区の被害が大きくなってしまった。」とのことであった。</p> <p>佐賀空襲については住喜重著『中小都市空襲』によると「米軍の第 58 航空団麾下の 2 軍団 68 機が 1945 年 8 月 5 日の午後 11 時 41 分から 6 日午前 0 時 43 分までの 1 時間に、459 トンの高性能爆弾、焼夷弾を投下したが、闇に隠れた佐賀は燃えず佐賀の消失面積 0 であった。レーダー・スコープ上の佐賀市の映像は弱く、灯火管制も万全であったので、結局南佐賀の田圃に全弾を投下、農家や鎮守の杜を焼いただけで終わった。」とある。佐賀市の HP では、焼夷弾によって多くの家屋が焼け、命を落とされた方は 61 名と記されている。特に国道 208 号線沿いの諸富、北川副、大崎地区は酷く、「堀という堀には村人たちが首まで水につかって、頭には水草をのせて空襲の終わるのをまっていた」と記されている。なぜ佐賀市の被害が少なかったのかについては諸説あるが、宮崎さんが話してくれた有明海の干満差がもたらした結果であるかもしれない。</p>
<p>その 37(ニューズレター No.107 2023.06.発行) 「低平地を測る」 三島 悠一郎 (佐賀大学 理工学部 講師)</p>  <p>ひがさすから望む低平地</p>	<p>佐賀県南部の低平地に広がるクリークは、同地域のシンボルであり、農業、防災、環境維持の面から地域社会にとって必須要素の一つといえます。最近では、クリークや水田を活用した「流域治水」や、その成り立ちについての特集テレビ番組が放映されるなど、改めて注目される機会がありました。しかし、クリークのように面的に広がるものの現状を把握しようとするのは困難です。昨今ではレーザー航空測量などによって精密かつ精細な地盤高の観測とその成果を利用できるようになりましたが、時間変化する様な事象、たとえばクリークの水位や貯水量の適時把握はできていません。また、クリークの水位管理は人海戦術によって成立していますので、人口減少、少子高齢化社会の現状を踏まえると、クリークの維持も危ういとも指摘できます。</p> <p>しかし観測技術は日々進歩しています。本年 5 月にはドローンを活用した水路管理の実証実験が行われました。また、同月には GNSS による標高観測の精度向上に資する高精細ジオイド計測が終了したことが国土地理院から発表されました。ドローンや GNSS 技術発達は面的な観測には欠かせないので、今後のクリークの維持管理が改善されることが期待されます。</p>

※執筆者の所属等はその当時のものです。

低平地研究会